



沖

俳句雑誌[おき]

4月号

沖 発行所

虫出しの雷

能村 研三

蔵書の整理

先日、俳人協会の石川県支部で講演をするため、登四郎の『八掌部落』と澤木欣一の『鹽田』の初出が掲載されている昭和三十年十月号の「俳句」が見たいと思い俳句文学館で必要なページをコピーしてもらった。二つの作品とも昭和の俳句史には欠かせないものである。これまでに多くの方々が閲覧したり、書き写したと思われる形跡があった。一部は破損しており、セロテープで補修されていたが、それも劣化しているため、ページをめくるととれてしまいそうで恐る恐るページをめくった。

俳句文学館を利用する方法は、「沖」論客の渡辺昭さんから教えてもらった。こうした資料は自分で持っていてもすぐに出て来ないので、掲載月をメモしインデックスを作っておけば、それを目安に資料が保存されている所で調べることが出来るのである。

かぎの手に細め火通す畦火かな

亀鳴くやアンケートト結果惑ふなよ

テリトリー決めて屈めり蓬摘む

春の夜の眠りの壺と折り合はず

春宵や出待ち入待ち楽屋口

加賀愛でて虫出しの雷賜はれり

一筋は心鎮めの野火けむり

引き際の美学を嫌ひ目刺喰ふ

「霾れる」季語に複雑多様かな

後背に雪嶺高き別れかな

た書庫がある。父登四郎の書庫が二室、二階には、私専用の書庫が一室。書庫というものは系統的にきちつと整理されていらないといざ何か調べものをする時にもうまく活用されない。結局は探している時間が惜しいので、インターネットを使った通販で古本を買うか、俳句文学館に行つてしまふことが多い。

かつて編集の手伝いで林翔先生の書齋に入った時、先生は句集も作家別五十音順に並べられており、このような整理方法があるのかと感心したことを覚えていた。

開かずの書庫であることは、蔵書にも申し訳ないので、徐々に整理をしていかなければと思つている。

この四月からは一週間に三日の勤務となり、仕事内容も変わることから、この三室の書庫を整理していきたいと思つている。

能村 研三

蒼茫集



折り紙

辻美奈子

折り紙の音の続きぬ春の雪
名のついてより猫の子の末子めく
百千鳥鈴カステラの賑はひに
亡きあとの母を四月の海とおもふ
飼ひ猫の玉座といへり冬日向
春や春とびらをひらく門がまへ

しゃぼん玉

北川英子

まんさくの陽ざしの窓辺予後の席
しゃぼん玉星にも生死ありにけり
春愁や意味なく人と会はずをり
波音の聞こえて遠し花菜道
頬を刺す風も新生二月光
ポケットより春宵一瞬財布消ゆ

青空

安居正浩

枯れありてこそ青空の静謐に
たつぷりと圧す待春の足三里
たぎる湯に水差してゐる牡丹雪
全身が春風になる鳥になる
蛇穴を出づる諸般の事情あり
野仏のころころ笑ふ春の風

椿落つ

荒井千佐代

薄氷にかすかに風の擦りしあと
妬心なだめつ大根の桂剥き
亡き父母を恋ふや沖より虎落笛
途上国思はば食も暖房も
立春の潮マリアの御裾打つ
椿落つ神は死のみを平等に

二月礼者

宮内とし子

赤ん坊見せにと二月礼者なり
笹子鳴く島に小高き山二つ
淡雪や文具売場の試し書
ジーンズの居住まひ正し厄落す
極まれば慟哭となる雪解川
春浅し繰れば音する新刊書

初夢の

大川ゆかり

公園に動かぬ電車冬日差す
日向ぼこもうすぐ思ひ出せさうな
初夢の続きのやうに人に会ふ
お祝の広間に香る冬薔薇
天婦羅の海老の尾太し初恵比須
春の水小さき魚ちりばめて

マスクの変

細川洋子

喧噪のMRI抜け春の雪
きさらぎの手水琅玕囲ひかな

春浅きライ麦パンにある酸味
あまり多くてマスクの変と思ひけり
直滑降つらぬく長老スキーヤー
しんしんと角膜の冷え探梅行

虹の端

千田百里

天網恢々真冬の櫛通りかな
寒月光木馬は失踪の構へ
雪降る降る此度は度胆抜かれしよ
三猿に成り切り春の日向ぼこ
引く波に春愁の足掴まるる
途中下車しませう春の虹の端

日脚伸ぶ

高橋あさの

自転車を押して坂道日脚伸ぶ
梅剪定余念なき音の空へ抜け
蔵街の灯の濡るる春の雪
雪折の八ツ手の枝の生々し
梅日和鳶は羽ばたくこと忘れ
影よりもひかりの濃ゆき二月かな

春 武藤嘉子

鶯のひと声のみの朝茶かな
水温みいつしか齡ふえにけり
春なれやよぼれ雀の影をどる
春耕や土に雨しむ日暮来て
明るくてやはり寂しき春の雨
立ち止まる肩に易しき雲雀東風

野草図鑑 松井志津子

雪雫光の楽の絶ゆるなし
野草図鑑持ちて四温の人となる
廠かに手早くすすむ冬の葬
湖青し白鳥の声かうと透く
讚ふも愛も白鳥頸交はず
哺き合へる白鳥帰心確かむや

暗号 千田敬

街騒を呑みこむ東京雪景色
樟の葉にとも癒しの春の露
浦霞松にあるらし曲る相(さが)
わが詩に栞らむ春の夕星よ

暗号めく切手連ねし春便り
春疾風高層ビルは玻璃鎧ひ
天窓全開 久染康子

寒の水ごくり喉元太りけり
鶴守の鶴呼ぶ声の遠こだま
山笑ふがれ場の小石ころげ出て
きざはしのわが影蛇腹日脚伸ぶ
明らかに合格の顔走り来る
天窓全開春満月を招きけり

鍵盤 林昭太郎

レコードに針下りて雪降りはじめ
砂時計砂落ちきつて冬ざるる
山眠り星座いきいき巡りだす
鉛筆を削れば木の香雪催
山笑ひ磁石の針の揺れやまず
指置けばくもる鍵盤春の雪

柀刺す 鈴木良戈

雪片を追ふ雪片の速さかな
柀刺す星の光を頼りとし
柀を先づ刺す医院玄関に

寒椿ほろほろ波郷旧居かな
開門を吹き抜く風や春立てり
初午や戦で逝きし馬の数

冬 霞 大畑善昭

遁逃のやまびこ山は深き雪
毎日の雪肩腰を鍛へよと
早池峰は白象の背寒晴るる
除籍簿のその先の祖冬霞
春立つや経典にゐる龍蛇蝸
三五夜ごごよの月が点晴涅槃図は

鶏 鳴 上谷昌憲

校庭をヒる鶏鳴うすごほり
無芸大食寒卵片手割り
水仙のみなこちら向き我を見ず
電子辞書ぱちりと閉ぢて冴返る
お悔みに行く寒椿真つ盛り
雪残る銀座の路地に嵌りけり

日日抄 河口仁志

枯芝と云へど根方のうすみどり
日の射して花眼にしかと返り花

待つといふ忍の一念冬木の牙
一椀で充たす養生寒蜺
不意の客ありて埋火掘り返す
うすらひの水となりゆく浮力かな

病み堪へ 溯上千津

攻防の寒の鼠と根くらべ
陽に甘え風に抗ひ芽吹山
健啖に恥ぢらひ少し老の春
諾ひも異論も胸のうち余寒
共に詠み皆病み堪へて春一番
バーチャルの朧を覗く拡大鏡

瑞 門 湯橋喜美

梅ふふむ満願の経高らかに
荒行に開く瑞門冴返る
料峭の祠に揺れて千羽鶴
介護二級雛の調度飾る役
鼓打つ手つきあやふや離雛
方位盤手擦れのしるき山笑ふ

潮鳴集

積木の家

佐々木群

積木の家高く組み上げ春来る
草萌やスペイン広場踏みし靴
春眠の膝に分厚き工学書
棚霞より屹立す高層街
眼鏡橋円周率に春を掛け

重ね貼り

七田文子

木の影のやさしくなりぬ四温晴
値引札を重ね貼りして春一番
岸離るるうすらひ握手解くやうに
鈍行は暮しの匂ひ山笑ふ
春は曙とどなたの言ひし熟寝かな

少女の眼

宮坂恒子

桃咲いてふるさと少しづつ老いぬ
冬囲解く稜線のあかるき日
梅ひらく父へするどき少女の眼
引き鴨を発たせむと寄す大き波
夕日落つ寸前雪野の縹色

おはじき

栗原公子

おはじきに朱色ひとすぢ春隣
糸てがみに富士を大きく寒見舞
草萌やをさなに思ひがけぬ語彙
走り根にほたと音して寒椿
牡蠣鍋の味噌こげる香も馳走なる



沖作品



能村研三選

タイマーに瞬の静寂初写真

東京

五十嵐章子

湯をおとす音まだひびく霜夜かな

我が町をおとぎの国に雪の朝
どんな世とならむか五年日記買ふ
マラソンの号砲広ぐ初御空

福岡

高濱 章子

堀割の水きよらかに日脚伸ぶ

そのわけは多く語らず根深汁
山茶花に触れたる指で紅をひく

山形

佐藤 淑子

満天の星引き寄せし黄水仙

鎮もれる木霊抱きて山眠る
見えぬもの追ひかけて行く大旦
年賀状手書きの巳の絵落着かず
薄氷天井張つたと池の鯉
又ひとつ無垢の花咲く窓凍つる

湯たんぽで見る夢いつも昭和なり

東京

関根 揺華

青鷹の光塊となり飛び去りぬ
よくばつて生きむと決めて初鏡
噛むやうに寒九の水を飲みにつけり

木も石も物言ふ国の春兆す
黒煙の中の太陽どんど焼
磔刑の丘ひひらぎの花零る

長崎

水木 沙羅

七輪を据え参道の苗木市
手焙を上り榎に酒造り

蒸し米が杜氏曇らす寒造
冬萌や七十路に秘む夢いくつ
大寒の緞帳あがる雪路の忌

愛知

清水 由恵

笹子鳴くははの遠忌の遠嶺晴

目裏の師の鳩亭の敷松葉
筆先に込め寒明けの悼文

沖作品 15句選評

*
能村研

タイマーに瞬の静寂初写真 五十嵐章子

カメラのセルフタイマーの機能。三脚を立てて固定したカメラに、セルフタイマーを十秒ほどに設定して、カメラを固定して撮影者も一緒に撮影する。シャッターを押した人が走って集まっているところに向かうのだが、間に合うかどうか皆が心配する瞬間でもある。カメラの側には当然撮影者がいないのだが、そのだれもない所へ誰もが笑顔を見せる。何か不思議な風景である。その何秒間かの瞬間の静寂を面白く俳句で捉えた句で、正月の微笑ましさも描かれている。

満天の星引き寄せし 黄水仙 高濱 章子

水仙は冬の季語であるため日本の凛々しさを感じさせるが黄水仙は春の季語でややエキゾチックな感じがする。九州など

日射しの明るい南国に映える花でもある。黄金色に輝く黄水仙の群れ、それは湖のほとりの木々のもので風に揺れていたかも知れないが、その群が夜になると満天の空で耀く星を引き寄せているかのようであった。

薄氷天井張つたと池の鯉 佐藤 淑子

先日、金沢二世紀美術館を訪ねたら、庭のひとつに設けられたプールがあった。それを見下ろすと、あたかも深く水で満たされているかのように見えたが、実際は、透明のガラスの上に深さ約十センチの水が張られているだけで、ガラスの下は水色の空間となっていて、この内部にも入ることができる。この句を読んでいてこの光景を思い出した。鯉の側から見た視点が面白い。

青鷹の光塊となり飛び去りぬ 関根 揺華

矢島渚男の句に「むらさきになりゆく二羽の青鷹」という句があるが、「青鷹」は「もろかたがり」とも読む。作者はここで光塊と捉えた。鷹の名前はオオタカの一歳鷹をわかつたかと言い、黄鷹、若鷹と書き、二歳鷹は「かたがり」とよばれ撫鷹と書く。そして三歳鷹を「もろかたがり」と呼び青鷹一白鷹などと書いた。一般にオオタカといった場合は三歳鷹つまり「青鷹」のことを言うそうだ。青鷹の俊敏さがしっかりと描かれている。

(以下略)